

留学先からの報告

2018/06/24

The Scripps Research Institute

荻田譲

先日、今年の9月からスタートする1年生が研究室に加わり、気づけばもう4年生に片足を突っ込んでいます。ついこの間まで自分が1年生だったような気がするのにもうすぐ卒業です。

プロジェクトの雲行きはちょうど怪しくなってきたところです。前回の報告書の最後に行ったように、鍵反応がうまく行きました。その後いくつかの工程を経て重要な中間体を合成することに成功しました。ここから七工程を経ると既知化合物にたどり着き、形式合成達成、つまり全合成成功が100%約束されます。その七工程は類義した基質を使った反応が報告されている簡単とされる反応であり、手元の基質も量が少なかったため探求する必要はないとし、実際に形式合成を完成させることはしませんでした。その代わりにこのうまく行った合成経路をもっと短くできないかということで挑戦的な（ときに無謀な）反応、合成経路を試しました。結論から言ってどれもうまくいかず、6月現在、12月末に逆戻りした状況です。この半年でやったことが無駄であったとは思いません。たった1個の立体中心が反応性を完全に変えてしまうなど、去年の唯一うまくいった合成経路にたどり着けたことがいかに幸運だったかを痛感しています。逆にいえばやらずにおいた七工程が失敗する可能性を無視できなくなってきており、最近は非常に心労を感じています。

研究以外では3月から6月にかけてTAをしました。スクリプスは学部生がいないのでTAといっても大学院一年生15人程度のクラスを受け持ち、質問に答えたり、講義資料を集めたりテストを作って添削するだけなので、他の大学の学部生の授業のTAをすることに比べたら仕事の量はとても少ないと思います。来年の3月に所属研究室のPIが主催する授業（隔年）のTAをする予定です。

今年の四年生は皆卒業が早く、一人はもう製薬企業に就職を決めて研究室を出て行き、残る三人も今年中には研究室を去る予定です。こんなにも早く自分たちの代が最高学年になってしまって研究室は立ちゆくのだろうか、自分たちは下級生の見本になれているのか、彼らを教育できるのか、非常に不安です。